

「野分来る」

西をさむ

台風生まれ予報士いきいきす 有富洋二

台風の素は、北太平洋西部及び南シナ海で発生した熱帯性低気圧が勢力を増して、中心の風速が十七.二メートル以上に発達したのを台風と言うそうです。中心気圧では有りません。その年の始めから発生順に番号が付けられます。戦後暫くの間はアメリカに因っていて、女性名が付けられたそうです。但し、小野小町や清少納言では有りませんでした。

さて、この予報士は発生した台風の予報が的中するのが仕事だと思っているからです。

気象庁にストーカーされ野分行く 高橋マキコ

台風から見れば気象庁にストーカーされている様に見えるかもしれませんが、気象庁の職員にとっては必死です。最近では宇宙からの画像やコンピューターを駆使して彼女の行く末を老後まで心配しているのです。それでも彼女は右に行ったり左に行ったりして、時には一回転する事もあるのです。それは彼女の眼球の為、方向音痴に陥ってしまうからでの進路を正確に予想したいのです。日本に近付いて来るのか来ないのか？ もちろん上陸など誰も望んでいませんよね。でもこの予報士の心底には七対三ぐらいで接近を願っているのです。それは自分す。でも何故彼女は南西諸島あたりで方向転換する事が多いんですかねえ。

台風之眼にて黒人霊歌聴く 岸本マチ子

それは、今までの人間の愚かさに気付いて欲しいからです。台風も孤独なんですよ。

台風之眼に入る街の孤独かな 加藤はま子

これは、大都会、東京の事かも知れません。

東京が右往左往す大野分 鈴木ひさを

何やら現代社会への諷刺の様ですね。

包丁を研ぎ台風を待ちみたり 座間 游

何の為に包丁を用意したのでしょうか。それは次の句を読むと解ります。

台風に目があることのさみしさも 小川千枝子

包丁で目を潰して台風を遣っ付けようとしたのですが、それでは余りにも惨くはないかと思っただけでしょう。

梯子あり颱風の目の青空へ 西東三鬼

ところで、皆さんは台風の目を見た事がありますか？ 私は昭和三十四年九月二十六日の夜、避難していた祖父の家で、猛烈な暴風雨がピタッと止みました。そして伯父が外の様子を見に出ました。「おい、星が見えるぞ」と言ったので、私は急いで飛び出しました。空を見上げると確かに雲は途切れ、星が瞬いていました。それにも増して私を驚かせたのは、小鳥の囀る声でした。今でも私の耳の奥底に、その時の小鳥の声が残っています。死者五千人

以上の伊勢湾台風の時でした。

ゆっくりと野分に押され霊柩車                      清水基吉

でも私には、

野分来ることに少年浮き浮きと                      岩田由美